

保育者が養成校に求めている学び

～卒業後2年目の保育者への質問紙調査から～

小松 秀茂*・杉山 弘子*・東 義也*・荒川由美子**

What Do Young Nursery Teachers Ask the College of Early Childhood Education for ? :

The voices of teachers who graduated two years before

Hideshige Komatsu, Hiroko Sugiyama, Yoshiya Higashi, Yumiko Arakawa

要 旨

前回の調査（石田ら，2008、杉山ら，2008）を受けて、卒業後2年目の保育者たちを対象に、彼女たちが養成校にいかなる学びを求めているかを調査した。回収率の低さの故に、仮説提起の域を出ないが、①自己実現を求めて旺盛な学習意欲を持つ保育者が多い一方で、②学びたい分野は「原理的なもの」よりも「実践的なもの（保育の知識や技能）」とした保育者が多いこと、③非正規雇用によって不安定な生活を強いられ追い込まれた状況にある保育者が存在すること、④充実感・成長感を持っていないまま「学ばなければ」の状況に追い込まれている保育者が存在すること、⑤子どもや同僚、上司、保護者との人間関係に不安や悩みを持つ保育者も少なくないこと等々が判明し、養成校の果たすべき役割について多くの示唆を得ることができた。

キーワード：保育者養成、意識調査、リカレント教育

I 問題と目的

2007年3月、私たちは、卒業生を送り出すに当たって、「保育者としての専門性」を高める養成教育のあり方を探るために、「学生たちは、2年間の養成期間において何をどう学んだのか」「保育者として巣立つ直前の不安」「卒業後、大学に何を期待しているか」等々について明らかにすべく、アンケート調査を実施した（石田ら，2008、杉山ら，2008）。その結果、回答者のうち保育士資格と幼稚園教諭二種免許取得可能な学生を調査対象者として分析したところ、

- ・ほとんどの学生が2年の養成期間で成長感を得ていること（専門的知識・技能を獲得できたとした者が84.7%）
- ・授業や実習が大いに自分を成長させてくれたと感じているらしいこと
- ・反面、すべての学生が、卒業を前にして不安を感じていること（不安の内容としては、「保護者との関係」が82.8%、「知識・技能の修得」が75.3%、「他の職員との関係」が68.8%、「子ども集団をまとめられるか」が58.1%、「子どもとの信頼関係」が54.8%等々）
- ・卒業を前にしてもっと学んでおけばよかったこととしては、「保育現場の実際」を挙げる学生が突出して多かったこと（60%以上）
- ・目指す理想の保育者像については、個々において特徴があり多様であること

* 女子短期大学部 保育科

** 総合人間科学部 人間心理学科

- ・養成期間内で有効であった学習形式の一つとして、「協同による学習（他の学生の意見を聞いたり、集団で協力して取り組む学習活動）」が有効であったこと
- ・勉学を支えるシステムとして教員による学習支援に期待と信頼を寄せる学生が多いこと
- ・卒後に養成校に期待する内容としては、保育上の相談や経験の交流等を求める声が多かったこと（「保育上の悩みを相談する」が72.0%、「気軽に来校できる」が70.3%、「保育の知識・技能の情報を得る」が53.4%）

等々が明らかとなった。

こうした思いを胸に私たちの元を巣立っていった彼女たちは、今、自分をどうとらえ、何に困難や悩みを抱え、私たち養成校には何を求めつつ働いているのであろうか。

折しも、2008年3月28日、幼稚園教育要領と保育所保育指針が同時に改定された。地方財政の逼迫、少子化の問題等を背景にした幼稚園・保育所をめぐるこの間の情勢の進展は、保育者たちにも大きな影響をもたらしている。彼女たちを圧迫する状況の厳しさは尋常ではない。教育基本法改正による家庭教育、幼児期の教育の重視、小1プロブレムや幼小連携の問題、いわゆるモンスター・ペアレントの存在、子育て支援の推進、認定子ども園制度の導入（幼稚園保育所の一体化）、教員免許更新制、自己評価とその情報公開の義務化等々、枚挙に暇がない。まさに、幼児期の教育・保育が時代的転換期を迎えている最中に彼女たちはいる、と言って差し支えない。彼女たちの多くは「こうした要請には否応なく応じざるをえない」と感じていることであろう。元々、自分の仕事への誇りを基盤にした保育者たちの学習意欲、向上心の強さは、他の職業人と比べて優るとも劣るものではなかったが、ここにきて、社会からも押し付けられる状況が強まってきたように思われるのである。動機づけの側面に着目すれば、内発的動機づけに基づいて活発に学習活動を展開してきた保育者たちに、外発的動機づけに基づいて学習せざるをえない状況が生まれてきている、とも言いかえることができるわけで、こうした動機構造の変化は学習活動に対して必ずしも肯定的な結果を生み出すとは考えられない面がある（例えば、Green & Lepper, 1974）だけに、危惧せざるをえないところである。

私たちは、できるだけ卒業生の要求に応えるべく、例えばリカレント教育を推進していきたいと考えている。彼女たちの学習活動が、自らの関心、自己決定感、自己効力感に支えられたものであるためにも、私たちは、送り出した彼女たちの現状がいかなるものであるかをできるだけ正確に捉え、彼女たちに学習活動の機会を提供する必要がある。

以上を踏まえ、私たちは、卒業生を対象に再度アンケート調査を実施し、働き始める直前の意識と、約1年半弱経過した後の意識とを比較分析しようと考えた。それによって、これからの保育者養成の課題を（特にリカレント教育の内容をいかに構築すべきかの観点から）見定めることが本研究の目的である。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象：2007年3月に実施した卒業時アンケート調査の回答者で、その際、1年後の調査への協力を了解していたS短期大学保育科の卒業生72名。
2. 調査実施時期：2008年7月～8月。
3. 手続き：2008年7月下旬に質問紙を郵送し、8月20日までの回答（郵送）を依頼した。
4. 質問の内容：在学時のコースや現在の就労状況等について尋ねた後、幼稚園または保育所

で働く保育者（以下、保育者と記す）に対し、次の点を質問している。

- 1) 今ある自分に影響を与えた学生時代の活動
- 2) 機会があれば学びたい分野
- 3) 在学中の授業での話し合い及び集団活動への参加の仕方、及びその経験が今の仕事に生かされているか
- 4) 保育者として働いてみての充実感、成長感、悩み、学び
- 5) 大学との卒業後のかかわりとして期待すること

Ⅲ 結 果

1. 回収率及び回答者の就労状況

29名より回答を得た。回収率は40.3%である。回答者の内、幼稚園で働いているのは15名（内非正規1名）、保育所8名（内非正規6名）、福祉施設1名、一般企業1名、学生3名、主婦1名であった。

上記の通り、幼稚園または保育所で働く保育者は23名である。表1に職務の状況を示した。幼稚園の満3歳児保育の担任は3歳未満児担任に分類した。なお、保育所の預かり担当の回答は、延長保育担当と解される。

表1 職務の状況（単位：人数）

	3歳未満児担任	3歳以上児担任	フリー	障害児担当	預かり担当	計
幼稚園	0	13	1（1）	1	0	15（1）
保育所	5（3）	1（1）	1（1）	0	1（1）	8（6）

注）（ ）内は非正規の人数

2. 今ある自分に影響を与えた学生時代の活動

これ以降は、保育者として働いている卒業生24名の回答である。結果は表2に示した通りである。授業関連と学外実習の選択者が多く、合わせると70.8%（17/24名）になる。単数選択であったが複数回答した2名の内1名は、学外実習と就職活動を、もう1名は学外実習、部活等とアルバイトを選択している。この2名も学外実習に加えると授業関連との合計は79.2%である。卒業演奏会等も授業の一環としての位置づけをもつため、91.7%（22/24名）が広い意味での授業を選択している結果となっている。

3. 機会があれば学びたい分野

機会があればもっと学びたいと思うかを、4件法で尋ねた。結果は表3に示した通りである。「保育・教育の基本原則」を除き、24名中22～23名（90%以上）が「強くそう思う」または「そう思う」を選択している。中でも「保育実践」については「強くそう思う」の選択が24名中20名で80%を超えている。「保育・教育の基本原則」については、1/3（8名）が「あまり思わない」を選択している。

表2 今ある自分に影響を与えた学生時代の活動

学生時代の活動	人数
a. 授業を受けることや授業に関連する課題に取り組んだこと	9
b. 学外での実習	8
c. 卒業演奏会やオーケストラの定期演奏会	3
d. 合唱コンクール、体育大会、大学祭などの活動	0
e. 学生会や委員会活動	1
f. 部活やサークル活動	1
g. 就職活動	0
h. アルバイト	0
複数回答	2

表3 機会があれば学びたい分野（単位：人数）

分 野	強 そう思う	そう思う	あ ま り 思 わ な い	全 く 思 わ な い
a. 保育・教育の基本原理	2	14	8	0
b. 保育実践	20	3	1	0
c. 子どもの発達と心理	13	9	2	0
d. 子どもや障害児・者の福祉	12	11	1	0
e. 子どもの健康と安全	10	12	2	0
f. 家族支援	10	12	2	0
g. 5領域の保育内容と指導	11	11	2	0
h. 乳児保育・障害児保育など、特別な配慮を要する保育	13	10	1	0
i. 音楽、造形、体育などの基礎技能	12	11	1	0

表4には「強くそう思う」を4点、「そう思う」を3点、「あまり思わない」を2点、「全く思わない」を1点とした時の平均を、幼稚園、保育所ごとに示した。幼稚園と保育所で0.5ポイント以上の差があるのは、「子どもの発達と心理」および「家族支援」であり、いずれも保育所の平均値が高くなっている。

aからi以外で学びたい分野を自由記述式で尋ねたところ、5件の回答が得られた。幼稚園、保育所別に記す。

〈幼稚園〉

- ・季節の歌や制作で楽しめるもの
- ・応急手当
- ・保護者対応、制作指導法、体育（鉄棒、縄跳び、うんてい）指導法
- ・手遊び、ゲーム遊び

〈保育所〉

- ・手遊び、保護者対応

表4 職場別に見た機会があれば学びたい分野

分 野	幼稚園	保育所	計
a. 保育・教育の基本原理	2.6	3	2.6
b. 保育実践	3.8	3.8	3.8
c. 子どもの発達と心理	3.3	3.9	3.5
d. 子どもや障害児・者の福祉	3.4	3.6	3.5
e. 子どもの健康と安全	3.3	3.4	3.3
f. 家族支援	3.1	3.8	3.3
g. 5 領域の保育内容と指導法	3.3	3.5	3.4
h. 乳児保育・障害児保育など、特別な配慮を要する保育	3.4	3.8	3.5
i. 音楽、造形、体育などの基礎技能	3.4	3.6	3.5

4. 在学中の授業での話し合いや集団活動への参加の仕方、及びその経験が今の仕事に生かされているか

1) 話し合い活動

在学中、特別研究等、学生同士の話し合いが求められる授業への参加の仕方とその経験が今の仕事に生かされているかを4件法で尋ねた。結果は表5の通りである。「自分の意見を積極的に述べた」としているのは33.3%（8/24名）、「他の学生の意見をよくきいた」は91.7%（22/24名）、「グループでの話し合いに積極的に参加した」は79.2%（19/24名）、「グループでの話し合いを発表するために積極的に取り組んだ」は83.3%（20/24名）である。

また、75%（18/24名）が話し合いの経験が今の仕事に生かされていると回答している。ちなみに、これを幼稚園・保育所別にみると、幼稚園では73.3%（11/15名）、保育所では87.5%（7/8名）となる。

2) 集団的活動

授業で一つのことに集団で取り組んだ際には積極的に参加したか、また、その経験は今の仕事に生かされているかを尋ねた。その結果を表6に示した。「参加の仕方」と「今への影響」のいずれにおいても「全くそう思わない」の選択はまったくなかった。まず、95.8%（23/24名）が集団的な活動に積極的に参加したと回答している。また、79.2%（19/24名）がこの経験が今の仕事に生かされていると答えている。

両者の関係を見ると、75%（18/24名）が積極的に参加し、今に生かされているとしている。参加の仕方では「強くそう思う」を選択した9名の内7名は今に生かされているかでも「強くそう思う」を選択し、2名は「そう思う」を選択している。参加の仕方では「そう思う」を選択した14名中8名は、今に生かされているかでも「そう思う」を、1名は「強くそう思う」を選択しているが、5名は「あまり思わない」を選択している。参加の仕方では「あまり思わない」を選択した1名は、今の仕事に生かされているかでは「強くそう思う」を選択している。

表 5 話し合い活動への参加の仕方と今への影響（単位：人数）

分 野	強 く 思 う	そ う 思 う	あ ま り 思 わ な い	全 く 思 わ な い
a. 自分の意見を積極的に述べた	2	6	15	1
b. 他の学生の意見をよく聞いた	10	12	2	0
c. グループでの話し合いに積極的に参加した	5	14	5	0
d. グループでの話し合いを発表するために積極的に取り組んだ	2	18	4	0
e. 今の仕事に生かされている	1	17	6	0

表 6 集団的活動への参加の仕方と今への影響（単位：人数）

参加 影響	強 く 思 う	そ う 思 う	あ ま り 思 わ な い	計
強く思う	7	1	1	9
そう思う	2	8	0	10
あまり思わない	0	5	0	5
計	9	14	1	24

5. 保育者として働いてみての充実感と成長感

保育者として働いてみて充実していると感じているかどうかと、仕事を通して自分は成長したと思うかを4件法で尋ねた。結果は表7に示した通りである。充実感、成長感とも「全く思わない」の選択はなかった。充実していると感じているという回答および仕事を通して成長したと思うという回答が、それぞれ87.5%（21/24名）である。

両者の関係を見ると、83.3%（20/24名）が充実感を感じ、成長したと思うと回答している。他方、充実感を強く感じるとしている11名中1名が、成長したとはあまり思わないと回答している。また、充実しているとはあまり思わないとする3名中2名は、成長したとはあまり思わないと答えている。

6. 仕事上の悩み

仕事上、どんなことで困ったり、悩んだりしたかを、A群、B群の選択肢からそれぞれ一つを選択してもらった。A群には保育の知識や技能に関わる事項をあげた。結果は表8に示した通りである（この表には、福祉施設就職者1名のデータは反映されていない）。62.5%（15/24名）が保育技能を選択しており、幼稚園、保育所とも最も選択数が多くなっている。複数選択の中身は、幼稚園の1名が「子ども理解+保育技能」、保育所の1名は「子ども理解+保育技能+クラス運営+指導計画の作成」であり、どちらにも保育技能が含まれている。

B群は人間関係や園の方針、労働条件等を選択肢としている。結果は表9に示した通りである（本表にも、福祉施設就職者1名のデータは反映されていない）。幼稚園では、15名中8名（53.3%）が上司との関係または園の保育方針を選択している。保護者との関係が幼稚園、保

表7 保育者として働いてみての充実感と成長感（単位：人数）

成長感 \ 充実感	強く 思う	そう 思う	あ ま り 思 わ な い	計
強く思う	5	2	0	7
そう思う	5	8	1	14
あまり思わない	1	0	2	3
計	11	10	3	24

表8 仕事上の悩み ＜A群＞（単位：人数）

	幼稚園	保育所	計
子どもの理解	1	1	2
保育技能	9	6	15
生活面での援助	1	0	1
遊びへの援助	0	0	0
クラス運営	3	0	3
指導計画の作成	0	0	0
複数回答	1	1	2

育所のいずれにおいても複数名によって選択されている。複数回答の中身は、幼稚園の1名は、「保護者との関係＋労働条件＋自分の健康」であり、保育所の1名は、「園の保育方針＋労働条件」である。これらを含めると、4名が労働条件を、幼稚園の3名が自分の健康を選んでいることになる。労働条件を選択した4名の内、3名は非正規雇用である。自分の健康を選択した3名はいずれも正規雇用で、職務は4歳児クラス担任2名、障害児担当1名である。

なお、A群で子ども理解を選択した3名の内2名はB群で子どもとの関係を選択し、1名は保護者との関係を選択している。

7. 保育者として学んだこと

保育者としての1年間で大切だと学んだことを自由記述式で尋ねた。結果は多岐にわたった。向上心（恒常的な努力、学ぼうとする姿勢、振り返り・気づき等）が大切と学んだ者、子どもの深い理解が大切と学んだ者、保育技能が大切と学んだ者、人間関係（子ども、上司、保護者との信頼関係や気配り等）が大切と学んだ者、保育者としての資質（常に笑顔で接する保育態度、常に元気であるための体調管理、子どもに対する愛情、保育者としての自覚・責任感、子ども観・保育観等）が大切と学んだ者、自己効力感（自信を持つ、やりがいを感じながら仕事する等）が大切と学んだ者等々（重複する場合もあり）である。全体的に見ると、

- ・向上心が大切と学んだ人（7名）では、日常的に保育技能で悩んでいる傾向が強い（7名全員）が、大学に対してリカレント教育を求めた人は少ない（7名中1名）傾向にある、

表 9 仕事上の悩み < B 群 > (単位：人数)

	幼稚園	保育所	計
子どもとの関係	1	1	2
上司との関係	4	1	5
同僚との関係	0	2	2
保護者との関係	2	2	4
園の保育方針	4	0	4
労働条件	1	1	2
自分の健康	2	0	2
複数回答	1	1	2

表 10 大学に期待する内容 (単位：人数)

	幼稚園	保育所	計
気軽に来校できる	2	3	5
現任保育者のための研修に参加する	1	2	3
保育についての情報を得る	6	2	8
保育上の悩みを相談する	1	1	2
授業を聴講する	0	0	0
就職、進学など将来のことを相談する	1	0	1
同窓生と教員との集まりに参加する	4	0	4
その他	0	0	0

・人間関係が大切と学んだ人（10 名）とそうでない人では、「学習意欲ポイント（問 8 で「学びたいと強く思う」に 1 点を与えた場合の合計点で、満点は 9 点）」に若干の差（平均点で 3.7 点と 4.5 点の差）がみられる、
 といった傾向は認められたものの、「1 年間で何を大切と学ぶか」に影響する強い要因を推測することは困難であった。「同僚や上司の人格的特性」のような「巡り合わせ」によるものなのかもしれない。

8. 大学とのかかわりへの期待

卒業後の大学とのかかわりとして最も期待することは何かを選択肢をあげて尋ねた。結果は表 10 の通りである。「保育についての情報を得る」が 34.8 %（8/23 名）で最も多い。「授業を聴講する」がゼロとなっているが、他は、来校したり、関係者とのかかわりをもつことを選択している。

Ⅳ 考察

1. 保育者としての1年

短大卒業後1年3ヶ月を経過する中で、回答者たちは新任者としての大変さを感じながらも、専門職に就いているという誇りを持って仕事に取り組んできたようである。「保育者として働いてみて充実していると感じているか」「成長したと思うか」という問いに、「充実していると感じている」「成長したと思う」と回答したものが、それぞれ87.5%（21/24名）を示していた。しかも、「まったくそう思わない」という選択肢を選んだ者はおらず、何らかの意味で保育者としての実践に手ごたえを感じ取っているようである。

彼女たちは、2年間の大学での学びとどう関わらせながら、現実をきりとってきたのだろうか。その意識のありようについて、以下に考察していく。

2. 在学中の学びの体験

1) 今ある自分と学生時代の活動

自分に影響を与えた学生時代の活動としては、「授業関連科目と学外実習」をあげた者が多かった。卒業演奏会等、授業の一環として位置づけられている活動・行事も含めると91.7%（22/24名）の人が、広い意味での授業を「今ある自分」に影響を与えた学生時代の活動としてとらえている。保育者養成課程では、カリキュラムの過密化を指摘されることが多い。今回のアンケートの調査協力者となった卒業生たちも、在学中には授業以外の活動に時間をとることができなかったのかも知れない。しかし、1年余りを過ぎたときに、授業は意味のある活動だったととらえられていることは、卒業生による授業評価として受け止めておきたい。

2) 在学中の「話し合う授業」への参加経験

他者との共同によって成り立つ保育の仕事の担い手となる学生が、コミュニケーション能力や共同する力を2年間の中で確実なものとなしえたのか。そして、実際の現場で仕事をする中で、それらの学びをどうとらえなおしているのか。保育者養成校としては、詳細にまた継続的に検討すべき課題としてとらえている。

先の卒業時アンケート調査において、私たちは、授業での話し合いや集団活動への参加の仕方について、意味のある経験であったか否かをたずねた（杉山ら、2008）。その結果、「意味のある経験だった」として選択したのは「他の学生の意見を聞く」と「集団で一つのことに協力して取り組む」という二つの項目であった（いずれも96%を超えていた）。

今回は、在学中を振り返ってもらい、自分はどのように参加していたのかをたずね、その経験が今の仕事に生かされているのかという2点について回答してもらった（表5、6参照）。

まず、「話し合い活動」では、「他の学生の意見をよく聞いた」（91.7%）ことと「集団での話し合いに積極的に参加した」「集団での話し合いを発表するために積極的に取り組んだ」（ともに79.2%）と、1年前の意識との差異はみられない。

そして、「それらの経験が今の仕事に生かされているか」という問いには、75%が「生かされている」と答えている。しかし、上で見たように（結果4の1参照）、幼稚園と保育所とで違った状況にあることが窺えた。このことは、話し合いの位置づけや話し合いの持つ意味が職場によって異なることを示唆している。聞き取り調査を行うなど、さらに詳細な追跡調査が必

要であろう。

次に、「集団的活動」では、積極的に参加していたとその頃の自分を振り返った者が95.8%であり、今その経験が生かされていると感じている者は79.2%であった。このうち、学生時代も積極的に参加し、今もその経験が生きていると感じている者は75%であった。養成課程のすべての授業がこうした形式で進められているわけではない。しかし、卒業生はこうした学びの形態を、保育者として仕事をする上で有意義なものであったと判断しているという事実を、今後保育者養成カリキュラムを改善していく上で、またリカレント教育を進めていく上においても、生かしていくことが必要であろう。

3. リカレント教育の充実に向けて

働きながらも機会があれば学びたい分野としては、ほとんどの（「原理的なもの」除いた）選択項目について、90%以上の者が「強くそう思う」または「そう思う」を選択していた（表3）。やはり、1年間の保育経験では、さらなる課題を見出すことの多い日々となっているのだろうか。

ベテラン保育者は、「若い人たちは、子ども観としてはいいものをもっている」としつつも、「遊びも含めた生活的な力を一からつけていく」「生活技術的な現実の保育を学んでいかなければならない」と指摘している（伊藤ら、2004）。回答者中1名を除いて全員が「強くそう思う」「そう思う」と選択した「保育実践」は、まさに、こうした伊藤らの指摘と符合するものであろう。

本研究ならびに卒業時のアンケート調査の対象者となった彼女たちは、「どのような保育者になろうとしているか」という問いに、「子どもを第一に考えるという姿勢」を持ち続ける保育者、「子どもへの共感性」を持ち、「子どもとの信頼」を築きうる保育者を目指したいと答えていた（石田ら、2008）。これは、子どもたちとの日々の生活の中で一つひとつ積み重ねられていく必要のある、まさに保育者にとって最重要課題の一つであるが、よい保育者になりたいという強い意欲と、子どもたちとのかかわりを大切にしたいという姿勢をなくすことなく、しかも専門性の高い仕事をこなしていくには、「実践しながらの学びにとどまらない学び」をどのように保障していくかという職場外研修のありようも重要になってくる。

学びたい分野として挙げられたもののうち「保育実践」「子どもの発達と心理」「乳幼児保育・障害児保育など、特別な配慮を要する保育」「子どもや障害児者の福祉」「音楽・造形・体育などの基礎技能」の諸項目は、卒業時アンケート調査において、「もっと学びたかった専門科目の分野」において選択されたもの（石田ら、2008）と一致している。これらの分野のうち、子どもの発達と心理に関わるものは、学んだことを生かしながらも、現実の子どもの発達のありようが多様であること、個々の子どもが持っている要求のありようが、当然のことだが、一人一人全く異なるという現実と直面し、一般的な対応では済まされないという認識が生じてきていることとも関連しているのであろう。このことは、特別の配慮を要する保育においても当然当てはまるであろうし、それらの要求を受け止め、子どもの満足感を高めていくために、今以上の基礎技能を持ちたいと願うのであろう。

塩路ら（2001）は、幼稚園教諭と保育所保育士にアンケート調査を行い、現職の保育者が大学院教育に望んでいることを明らかにした。そこでは「保育カウンセリング」「発達心理」「子ども理解」が上位を占めたという。塩路らは、その結果から、「実際の保育現場で、子どもを

いかに把握するか、が最も関心のある問題である」ととらえ、その意味を考察して次のように述べている。「このことは、『子どもを理解し、把握すること』の困難さと奥深さを、現場の保育者がもっともよく実感し悩んでいることをあらわしているのではなかろうか。」

垣内（2008）は、『保育白書 2008 年版』において、754 名の調査協力者のうち、「専門性の高い実践ができていないか」という問いに、「できている」「だいたいできている」と自己評価した者が 33 % であり、「あまりできていない」「できていない」が 19.1 %、「どちらともいえない」が 45.5 % であると報告している。「現実には多くの保育者が揺らぎ、確信がもてないでいる実態にあるといえる」。

こうした報告から見ても、卒後 1 年目の回答者たちが幅広い分野での学びをまだまだ必要だと感じることは、深くうなづけることである。

4. 非正規雇用の問題

雇用形態についてみると、幼稚園では 15 名中 1 名が非正規雇用であるのに対し、保育所では 8 名中 6 名であり、保育所で非正規雇用の割合が高い状況にあった。正規雇用者と非正規雇用者との、学ぶ意欲にどのような違いがあるかを見てみたところ、

- ・非正規雇用の方が「もっと学びたい気持ち」が強い（問 8 で尋ねた「機会があればもっと学びたいと強く思う領域」が 9 領域中 6 領域以上の者の人数を見ると、正規雇用者では、17 名中 4 名（23.5 %）であったのに対し、非正規雇用者では 7 名中 5 名（71 %））
- ・非正規雇用の場合、充実感を感じても、成長感につながっていない傾向がある（7 名中、充実感を強く感じた者が 3 名いたのに対し、成長感を強く感じた者は 1 名）
- ・非正規雇用の 7 名全員が「保育技能」で悩んでいる
- ・非正規雇用の 7 名の大学に対する期待は、2 名が「現任保育者対象の研修」、3 名が「保育についての情報」、1 名が「保育技能」であり、リカレント教育の要求も高そうであるといったことが判明した。「充実感はあるのに成長感が持てない」「同じように働いているのに、将来が同じようには保証されていない」といったある種割り切れなさが残る状況の中で、「保育技能に悩みながら」「もっと学びたい」と思っている姿が目に見え、彼女たちの学習活動への意欲・意志は、非正規雇用の状況という不安定な自分の人生をどう切り拓いていこうかという不安や迷いを反映してのものなのではないだろうか。自己実現へと主体的に向かっているというより、「勉強せねば」の状況に追いつまれているのかもしれない。ちなみに、「仕事上の悩み」として「労働条件」を挙げた 4 名のうち、3 名は非正規雇用であった。

5. 保育者としての充実感、成長感をもてないでいる気がかりな卒業生について

気がかりな卒業生がいた。現在、幼稚園勤務（正規雇用）、5 歳児クラス担当である。彼女の状況で気になる主な点は、以下の通りである。

- ・クラス運営の面で悩んでおり、また、「この 1 年間で大切だと学んだこと」として、「子どもの気持ちを理解すること」を挙げており、子どもとの関係がうまくいっていないことが窺える。
- ・また、上司との関係等人間関係の面にも悩みがあり、「上司への気配りや保護者との信頼関係が大切であることも学んだ」としている。
- ・学習意欲が高くない（「保育に関する基礎技能」については、学びたい気持ちが「ある程

度ある」が、それ以外の分野についてはすべて「あまり学びたいとは思っていない」。

- ・保育者としての充実感がなく、この1年間での成長感も持てていない。
- ・母校に期待するのは「保育についての情報」としているが、上記の諸点を考慮すると、リカレント教育的なものを求めているようには見えない。

このように、彼女は、保育者としての自分に手ごたえ感を持たず、人間関係、特に上司との関係に悩んでいる。子どもの心がつかめていないという不安もあるようで、クラス運営の面でも自信が持てていない。またそうした悩みは、学習意欲や向上心にはつながっていない。正規雇用でありながら、不安定な状態で勤務している可能性が強い。離職する可能性も懸念される。こうした人には、リカレント教育としての場というより、まずは、安心して受け入れてもらえ、話をよく聞いてくれる場が必要であろう。こうした場を提供していくことは私たち養成校に課せられた重要な責務の一つである、と考える。

V さ い ご に

地方財政の逼迫、少子化を背景に、市場原理・競争原理や成果主義の波は、保育者たちにも容赦なく襲いかかっている。保育者たちの保育観がゆさぶられている状況が目につく。保育観を支える軸足がぶれれば、保育者の意識（やりがい、生きがい）に影響し、「保育者としての自己実現の要求」に否定的な影響を及ぼすことは容易に考えられる。何が大切かを（子どもの側に立って、根本から）学ぶよりも、自分の評価・価値を高めるためにはどうすべきかにとらわれるようになってしまいかねない。こうした流れに歯止めをかけるためにも、養成校の果たすべき役割は大きい。悩みや困難を打ち明け、相談できる場を提供する。世の中の情勢にゆさぶられない確固とした子ども観、保育観を形成・維持できるように応援する。資質と専門性の向上のために研修の場を提供する等々。今回の調査を通じて、私たちは、私たちの元を巣立っていった若い保育者たちから、私たちが果たすべき役割について、多くのことを確認できたし、また新たに学ばせてもらった。記して謝意を表したい。

VI 引用文献

- 石田一彦・東義也・荒川由美子・杉山弘子 2008 保育者養成の課題－学生たちは2年間で何を学びどう育ったのか－ 尚綱学院大学紀要第55集 129－140
- 杉山弘子・荒川由美子・東義也・石田一彦 2008 保育者養成における学びの形態 尚綱学院大学紀要第55集 91－100
- Green, D. and Lepper, M.R. 1974 How to Turn Play Into Work. *Psychology Today*, 8(4), 49-54.
- 伊藤亮子・林若子・小山道雄 2004 もっと考えて!! 保育者の専門性と労働条件 新読書社
- 垣内国光 2008 保育者の専門性と労働条件－構造改革のもとですすむ労働環境の悪化 保育白書2008年版 154－157
- 塩路晶子・佐々木宏子・橋川喜代美・浜崎隆司 2001 現職保育者の大学院修士課程に対するニーズ－徳島県徳島市・鳴門市の幼稚園教諭・保育所保育士を中心に－ 保育学研究第39巻第1号 61－68